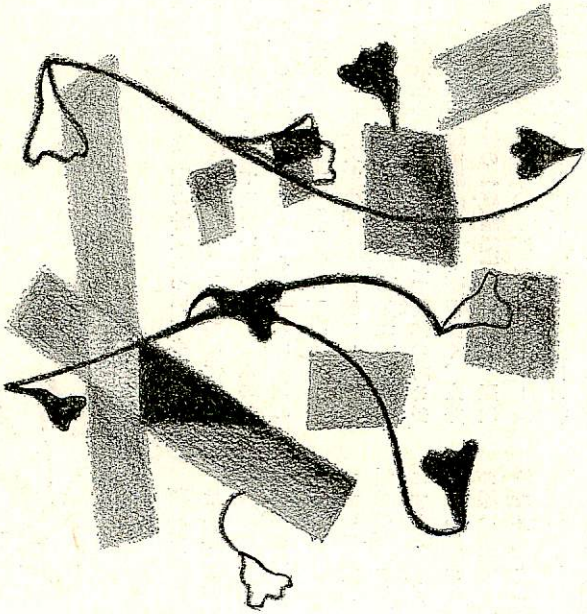
三田文學

季刊　文芸雑誌
MITA BUNGAKU
一九八九年十一月秋季号
第六十八巻　第十九号



文学談義——クロストーク

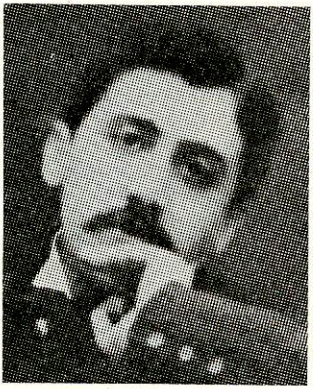
佐々木涼子

プルーストとマドレーヌ・ルメール

マドレーヌ・ルメール（一八四五—一九二八）。女流画家。フランスのベル・エポックの花である。

「花」というのにも、ひと通りでない意味がある。まず第一に、彼女が描く花の水彩画は、一八八〇年から一九一〇年までの三十年間、つまりフランスが最もはなやかであった時代に、大流行した。花と言えばルメール夫人、だった。彼女の愛人のひとりであったデュマ・フィス、あの『椿姫』の作者の言葉を借りれば、「神に次いで、最も多くの薔薇を創造したのは彼女である」。また、詩人のロベール・ド・モンテスキューは、彼女に「薔薇の女帝」という異名をたてまつった。もっとも、デュマ・フィスとのことについては、ルメール夫人はいつも彼を「ムッシュー」と呼んでいたものだから、夫人の娘のシュゼットさえ、二人の関係に最後までまったく気がつかなかったという。何となく、人柄の一端をしのばせる話、という気もしないではない。

しかし、もっぱら花を描いたというだけではない。彼女自身が花でもあったのだ。プルーストの伝記作家ペインターによれば、一八九〇年代、「彼女のサロンは、ブルジョワのサロンのなかでも最も華々しく、最も人の出入りの多いところで、貴族階級の最高に閉鎖的なメンバーは別として、その当時の重要なものすべてに出会うことのできる唯一のサロンだった。彼女ははじめ、自分と同じような芸術家を迎えていた。（中略）が、まもなくフォーブール・サン＝ジェルマンの貴族が足を向けるようになった。というのも、芸術家に逢えるというのは素敵なことだったからだ。



プルースト

そして、芸術家の数も少しずつ増えていった。というのは、フォーブールの貴族に逢えるというのもまた、劣らず素敵なことだったからである」。

モンソー街の彼女の家はとても小さくて、そこに当時パリの著名な人士がおしあいへしあいし、座る場所もなくて、ひどく身分の高い人も立っていなければならないほどだった。そんなふうだから尚のこと、人々は競ってでかけていったのだろう。時代やお国柄の別なく、人気とか流行とかいうものは何とも奇妙なものである。そして言うならば、ルメール夫人というのは、その当時、そういったたぐいの有名人だったわけである。そしてそのご本尊はと言えば、大柄な身にキンキラキンの夜会服を雑にまとって、数多いパーティの采配をふるう一方、日中は、売れる絵を大量に描きまくっていたわけだから、何はさておき、大変にエネルギッシュな女性であったことだけは確かである。その絵は、どんな小さなものでも五百フランはしたという。

＊

しかし、いかに一時代の寵児であったにしても、もし『失われた時を求めて』の作者との付き合いが無かったとしたら、マドレーヌ・ルメールの名が、死後六十年を経てもなお、これほど取り沙汰されることはなかったに違いない。

プルーストの書簡にルメール夫人の名前が頻繁に登場するようになるのは、一八九三年の春以降のことだから、プルーストがこのサロンの常連になったのは、この頃からと思われる。ちょうどその時期、一八九三年四月十四日金曜日の「フィガロ」に、ルメール夫人の夜会のレポートが載っている。今で言えば、さしずめテレビのワイド・ショーで放映される有名人のプライヴァシーと言ったところだろうか。

（中略）昨夜のレセプションは、エレガントなディナーで始まった。周知のごとく、この偉大な芸術家のサロンは、パリ社交界の知的な中心のひとつで、昨夜は、エリートからなる観客を前にしてバルテ嬢が、ジョゼ・ド・エレディア氏とロベール・ド・モンテスキュ＝フザンサック伯爵の詩を幾篇か、素晴らしい調子で朗読し、それが当日のイベントであった。

この席にプルーストも居たのだった。が、言うまでもなく、「偉大な芸術家」と呼ばれているのは、もう五十に手の届こうというルメール夫人であってプルーストではない。プルーストはまだこのとき若干二十一歳、これといった職もなく、文学志望ではあるが、さりとて書いたものが本当の意味で活字になったこともないヒヨッコだった。

だがこのヒヨッコは、とてもこの「奥さん（メートレス）」あるいは「女主人（パトローヌ）」の気に入ったらしい。というのは、足しげく出入りするようになってまだ日も浅い一八九三年の秋、ルメール夫人はプルーストの処女出版を彼女の挿絵で飾ろう、と約束してくれたのだ。後の『楽しみと日々』である。

これはプルーストにとって、思いもかけぬ幸運だったに違いない。いや、見掛けのたおやかさとは裏腹に、どれほど周到でしたたかな目論見を抱く人間か、あの精も根も尽き果てるような『失われた時を求めて』でさんざん思い知らされているわれわれとしては、これがプルーストにとって単なる「タナからボタもち」であったとは、とても信じられない、おそらくは「気前が良く、衒のない女主人（パトローヌ）」をその気にさせるために、言うに言われぬ手練手管を使ったのではないかと思いたくなる

が、しかしその証拠はない。とまれ、その年の十一月五日、プルーストは友人のロベール・ド・ビイに宛てて次のように書く。

（中略）マドレーヌ・ルメール夫人がこの小さな本に挿絵を描いてくれるはずなのです。そういうわけでこの本は、そんなことでもなければこの本のことを知りもせず、またこの本を所蔵するのもただ挿絵のためというような、あちこちの作家や芸術家など、立派な人たちの多くの書棚に入ることになるでしょう。

自分の本はつまらないもので、ところどころみだりがましい部分もあるのだけれども、でも、もし多くのエリートたちの目に止まれば、この本を捧げるつもりでいる今は亡き二人の友、エドガール・オーベールとウィリー・ヒースのことも人の知るところとなる、それが自分の望みだと、これはいかにもプルーストらしい論法を用いてではあるが。

結局、『楽しみと日々』が世に出たのは、三年後の一八九六年だった。ルメール夫人がなかなか挿絵を描いてくれなかったのが、遅れた大きな原因である。彼女に催促してくれるよう、プルーストから担当編集者に宛てた手紙がある。ものの言い方まで細かく指示したあとで、

（中略）ルメール夫人が、もう四年来こんなふうに僕を文学の洗礼盤に据え置いたあげく（こんな素晴らしい代母を持って、本当に名誉なことですし、それは望む所ですけれど、でももう潮どきでしょう）、このうえまだ一年も僕を引き止めようなどと思わないでもらいたいものです。

プルーストはおそらく、この本で文学界に華々しくデビューするつもりだったに違いない。しかし、ことはそう旨くは運ばなかった。人気女流画家が、まったくの好意から、欲得ぬきで描いてくれた百枚からなるデッサン、加えてアナトール・フランスという大家の序文、それらがみな裏目に出てしまった。人びとは『楽しみと日々』という豪華本を、社交生活にうつつを抜かすアマチュア文学青年の手すさびとしか見なかったのである。確かにそのように見られても仕方のないところはある。言うならば真のプルーストとして熟成する以前の、いまだ素材にすぎないものだった。

世間は無理解だった。とくに同人誌の仲間たちの冷やかしは痛烈だった。ジャック・ビゼ（「カルメン」の作曲家の息子）の独身アパートでは茶番人形劇が行われ、親友のレオン・イートマンがプルーストの声を演じた。

プルースト――僕の本、読んでくださいました？

ラ・ジュネス――いいえ、高すぎて。

プルースト――ああ、みんながそう言うんですよ……、でも、フランス氏の序文が四フラン……、ルメール夫人の絵が四フラン……、レーナルド・アーンの音楽が四フラン……、僕の文章が一フラン……、詩が五十サンチーム……、合計十六フラン五十サンチーム、高すぎはしないでしょう？

ラ・ジュネス――でもあなた、アシェット年鑑にはもっと沢山のことが入っていて二十五スーしかしませんよ！

これは当時流行の遊びだったのだ。しかしプルーストはいたく傷ついた。彼は本当に傷つきやすいのだ。受けた傷の痛みそのものが彼自身の内面を深くえぐり、彼の人間と文学

とを鍛え、変質させていくのではないかと思われるほどに。

『楽しみと日々』は、甘ったるくて、底が浅くて、華奢で、それでいてまごうかたない燦きがあって、胸のひりつくような書物である。プルーストを愛すればなおのこと、苛々しないではいられない。そして、そのような複合した感情に、マドレーヌ・ルメールの絵は、実に見事に照応している。薔薇を得意とする女流画家が描いた細身の青年、エレガントで瀟洒なその姿には、彼女が見慣れた二十歳そこそこのプルーストが映し出されているのではないだろうか。それも、客観的な外観においてではなく、画家の眼が見抜いた真実として、プルーストの言葉を借りるなら、「芸術によって、ついに見出だされた真の生」として。

『楽しみと日々』ルメール夫人の挿絵

さて、それに対する作家プルーストの方はどうだったか。ルメール夫人のサロンにお目見えした当時の彼は、確かにその愛想の良さで、スピリチュエルな会話で、単に好感の持てる社交人というにすぎなかったかもしれない。しかし、これが実はただならぬ観察眼の持ち主、ただならぬ表現力の持ち主であった。その力を、ルメール夫人という得難い素材のうえに凝集しないわけはなかったのである。われわれはその成果を、ほかでもないプルースト自身の著作のなかに見ることができる。そしてその表現の変容は、まさにプルースト文学の生成そのものを跡づけているとも言えるのである。

ルメール夫人についてプルーストが発表した最初の文章は、一九〇三年に「ドミニック」という署名で「フィガロ」紙に発表された『リラの中庭と薔薇のアトリエ』である。この頃から彼は、「ドミニック」とか「ホレーショ」とかいう名前で、パリの有名なサロンのレポートをするようになったが、これもその一つ。バルザックを模倣した文体で始ま

り、ルメール夫人の「女主人」ぶり、集う客たちのようすなどが、生き生きと描かれているが、しかし、こうした文章を書くこと自体が、社交界の提灯持ちという印象をますます強めることになった。

ちょうどその時期、二十五から三十歳頃にかけて、プルーストは『失われた時を求めて』の萌芽ともいうべき『ジャン・サントゥイユ』という小説を書いていたが、これもまたルメール夫人と無関係ではない。主人公のジャンは、アンリ・ド・レヴェイヨンと親しくなり、その母レヴェイヨン公爵夫人からも大切にされて、休暇には領地レヴェイヨンに招待されるのだが、このレヴェイヨンという名前は、もともとルメール夫人の別荘のもので、プルーストも何度か滞在したことがあったのだった。その名を作中に用いたのは、プルーストにしてみれば、一種の社交的挨拶でもあったろうか。ただし、高貴でエレガントなレヴェイヨン公爵夫人は、われわれの頭にあるエネルギッシュな女流画家とはあまり似ていない。それともプルーストは、彼一流の炯眼をもって、一ブルジョワの芸術サロンを貴族も集う有名サロンにまで育てた、その上昇志向の彼方にあるものを見抜いていたのだろうか。

プルーストによるルメール夫人の肖像の完成には、『失われた時を求めて』のヴェルデュラン夫人を待たねばならなかった。第一巻の「スワンの恋」の「小さな核」で、常連をひきとめ、花形貴族＝「うんざりする人たち」をこきおろすのにやっきになっている「女主人（メ）」が、第五巻「囚われの女」では、別荘のラ・ラスプリエールに多くの貴族を迎え、シャルリュス男爵とモレル、アルベルチーヌと「私」の悲劇的な二組の恋に場を提供し、ついには、第七巻「見出だされた時」の最後に、自ら貴族の最高峰をきわめてゲルマント大公妃となる。このヴェルデュラン夫人は、いわば『失われた時を求めて』という大伽藍（カテドラル）を支える大きな柱のひとつだが、そのモデルと見做される数人のなかに、ルメール夫人も入っているのである。サロンの「女主人（パトローヌ）」としての客あしらい、その言葉づかいなどに、かつての「薔薇の女帝」を認めることができると人は言う。

＊

なま身の人と人との交流は、いつも時という流れに浮かぶ木の葉のようで、たいして根拠のない感情や、深い意味のない偶発事に押しやられるままに相寄ったり、離れたりする。それがたまたま芸術家同志であっても、ことに変わりはなく、付き合っているその時点で、二人を惹き寄せているものは案外、「芸術」などというものとは少し別のところにあったりするのではあるまいか。相手の存在が持っていた真の意味が明らかになるのは、つまらないお付き合いに貴重な「時を失った」、そのずっと後のことでしかない。

マドレーヌ・ルメールとプルーストとの親交は、彼が病気もしくは創作のゆえにほとんど世間に出て行かなくなるまで、波風なく続いた。しかし二人の間の書簡は、ほとんど残っていない。そしてそのことが逆に、二人の交流の隔てのない親密さを物語るようにも思われるのである。というのも、他の人々に宛てた手紙には、ルメール夫人の名が随所に、しかも親しげに書かれているのだから。とまれ、われわれの手元に残されているのは、ただ二人が相互に描いた肖像、相手と自分とのそれぞれの「芸術」によって限りなく変質し、おそらくはそれゆえに限りなく本質的なものである肖像が残されているのみである。